2018年4月29日・中野教会「聖書の学び」

聖書箇所：ナホム書1:1-15

**「ナホム書　主の怒り」**

　本日はナホム書からです。これは旧約聖書十二小預言書の7番目の文書です。その第一章に注目しナホム書を見たい、と思います。アッシリアの首都ニネベの滅亡を預言した文書です。アッシリアに散々痛めつけられたユダ族の救済についても預言されます。ナホムというのはヘブル語の動詞「na:ham」の変化形で「慰め」という意味です。この言葉は新約聖書において「悔い改め」と訳されている２つのヘブル語のうちのひとつです。したがって、この文書はニネヴェへの裁きを通して、イスラエルの民への「慰め」の使信を伝えているとともに、「悔い改め」により主なる神への立ち返りを強く促している文書でもある、と言えるでしょう。主なる神がユダ族の救いの部分に慰めを見ているのでしょう。しかし、この救いの部分はユダ族に限定された表現ではありませんので、今日の我々をも含め、世界中の民を想定したものということも出来ます。

　ナホムは1:1でエルコシュ人と記されています。どこか定かではありません。有力説はユダ王国南西部のベイト・イエブリンという町と推定するもので、これが一番説得的とされています。北王国は既に滅亡していましたので、ユダ王国の出身とするのは納得できます。時代を特定する言葉は1:1には記されていません。しかし、3:8にエジプトの町テーベが出てきますが、この記述よりしてアッシリヤによるテーベ壊滅のBC663以降であろう、と考えられています。他方、ニネベはBC612にメディア、バビロニア連合軍に占領されていますので、ナホム書の預言はその前であるはずです。ニネベ滅亡が事後預言であるとする根拠はありません。従って、アッシリアの脅威が大きかったユダ王マナセの頃とするのが妥当と思われます。BC7cの半ば、ということになります。イザヤが活躍した頃とエレミヤが悲劇の預言をした時期の間の時期になります。イザヤの後、エレミヤの前です。即ち、アッシリヤによる北王国の滅亡とバビロニアよる南王国の滅亡の間の時期ということになります。

この時代は、ユダ王国はアッシリアに翻弄されていました。北王国がアッシリアに滅ぼされた時の南王国の王はアハズでした。彼はアッシリアに対する従属的姿勢を保ち、アッシリアによる国家滅亡を逃れました。しかし、次の王ヒゼキヤは宗教改革により体制を整え、エジプトの支援を期待してアッシリアに対する反乱を起こしました。度重なるアッシリアの軍事攻勢に耐え、最後には、軍事的劣勢は明らかだったのですが奇跡的出来事が起き、アッシリア軍は撤退するという事も起き救われました。ヒゼキヤの後の王が子供のマナセです。マナセはアッシリアに従属的態度は示しながらも、時には反抗も企てたようです。宗教的にはバアル信仰の復活など聖書記者にこっぴどく批判されています。歴代誌下33:11にはマナセがバビロンにつれて行かれたと記されています。しかし、許され、エルサレムに帰り、ヤハヴェ信仰に立ち帰った、とされています。しかし、33:17には「しかし、民は、彼らの神、主にではあったが、高き所でなおいけにえをささげていた」とありますし、列王記下21章にはこの回心のことは記されていませんので、徹底したものではなかった、と想像されます。ナホム書が記されたのはマナセ王の時代でアッシリアの圧迫が強く、マナセ王のバビロン捕囚の頃、と考えると良いのではないか、と思われます。マナセのあとはヨシヤ王の時代にユダ王国は新興のマケドニアと組んでアッシリヤに対抗したり、ゼデキヤ王の時代に今度はバビロニアに反抗したり致しますが、とうとう最後BC587にバビロニアに滅ぼされてしまいます。要するに、ユダ王国はあちらについたりこちらについたりして自国の存続を図りますが、結局国家滅亡の憂き目にあう、ということです。この間のイスラエルの歴史を見ると、エジプトとアッシリヤの二大帝国に翻弄された歴史と言えます。

ニネベはアッシリアの首都であり大都会ですが、ニネベに関する預言は聖書の中に複数あります。まず、預言書のなかで最も古いものに属するヨナ書です。これは魚にのみこまれたヨナの話です。神様からニネベ滅亡を預言・告知せよ、と言われたが逃げようとしましたが嵐にあい、地中海で魚にのみこまれました。しかし、悔い改め神様の預言をニネベに告知することにしました。すると、ニネベの民は悔い改め神様に従う、ことになりました。そこで神様はニネベを滅ぼすことをやめます。ヨナは「こんなことだから預言を告知することなどしたくなかったのだ」と神様に抗議します。神様はとうごまに譬えて、悔い改めたニネベに対する憐みと恵みをヨナに示します。ヨナ書の成立は、ナホム書より100年くらい前であり、アッシリアが漸次、強大になっていく時期です。ここではニネベの町は問題ありとは言っても神の恵みの下にある、ことが前提になっています。次に、ゼファニア書2:13にニネベが出てきます。「主は手を北に差し伸べ、 アッシリヤを滅ぼし、 ニネベを荒れ果てた地とし、 荒野のようにし、砂漠とする」とあり、アッシリア、ニネベの滅びの預言です。ゼファニアはナホムの数十年のち、アッシリアが実際に滅亡する頃の預言者と思われます。ゼファニアの預言はナホムの預言を踏襲しています。これはエレミヤの時代です。これらの歴史をみるとこの弱小イスラエルがどうして神の民として選ばれたのか、考えさせられます。大国に翻弄されながら自国の生存を図ろうともがく人々です。逆説的にいえば、主なる神を頼るしかないのだということを悟らせるためにあえて神様はこの弱小民族を神の民とした、と言えるかもしれません。しかし、イスラエルはそのようになりませんでした。大国を頼りにしたり、軍事同盟を組んだりして、この世の力に頼る試みを繰り返してきました。その結果、国の滅亡と離散の民という宿命に置かれたのでした。これは私たち新しきイスラエルの証がどうあるべきかを考える時大きな教訓です。

さて、ナホム書本文に入ります。1:2-8節は先ほど読みました箇所の一部です。神様の性質を示している箇所です。1:2には「主はねたみ、復讐する神。 主は復讐し、憤る方。 主はその仇に復讐する方。 敵に怒りを保つ方」とあります。「ねたむ神」とはどういうことでしょう。英語ではジェラシーです。うらやむ、と言う意味であり、神様は何をうらやんでいるのか、神様の性質としておかしいのではないか、と感じられる、と思います。このヘブル語の言葉は「kano:」という言葉ですが、ヨシュア記24:19にも「ねたむ神」として出てきます。新共同訳聖書では両箇所とも「熱情の神」と訳されています。この「kano:」という形容詞の動詞は「ka:na:」であり、「大変熱心である」と言う意味で使用されています。第一列王記19:10には「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました」とあり、この「熱心」が「ka:na:」です。19:14にも同様の使い方があります。人間の間でのことでこの言葉が使われる場合は「ねたむ」でも良いのですが神様の性質を言う時は「熱情の」の訳の方が適当だと思われます。しかし伝統的に「ねたむ神」と言われてきたので、この表現を踏襲している場合が多いです。“熱情をもって愛する結果、そむくことを許さず、人間の目から見るとねたむように見える”という意味だと思います。要するに神様は熱情をもってこの世を、人間を愛してくださっている、ということです。この節をアメリカの神学者アクティマイヤーは次のように訳しています。「熱情の神、報復者は主/報復者は主であり、怒りの所有者/報復者はその敵に対抗する主/怒りの保持者はその仇に対抗する方」。これはヘブル語における語順を意識しながら、神・主、報復、怒り、敵・仇、対抗という言葉が韻を踏むように繰り返し使用されていることを示そう、とした訳です。新改訳の言葉を使うと、この節で「ねたむ神」、「復讐する神」、「憤る神」、「怒る神」の4つが示されています。この4つの底流には「熱情をもって選ばれた民イスラエルを愛する神」があります。ここに示された神様の性質は、イスラエルの主なる神は鎮座まします神ではなく、この世の出来事に介入してこられる人格神である、ということです。絶対神として永遠のかなたにおられる方ではないのです。この我々のどろどろした罪の現実のなかで狂うように人を愛し、働かれる神である、ということです。これは新約聖書にも綿々と流れています。

3節では「主は怒るのにおそく、力強い。 主は決して罰せずにおくことはしない方。 主の道はつむじ風とあらしの中にある。 雲はその足でかき立てられる砂ほこり」と言われています。重要なのは「怒るのにおそい」ということと「決して罰せずにはおかない」という点です。怒る、というのは愛の裏返し表現ですが、怒りを表すのは最後の最後である、と言われています。神様の怒りは人間の耐えられる範囲を超えたものですから、ぎりぎりまで神様は忍耐される、ということです。考えてみるといかに多くの、神様の怒りを招いてもしょうがない事を人間は、就中、私はしていることでしょうか。おそらく、自分では気づいていないことも多くあろうかと思いますが、少なくとも気づいたら、悔い改め、そしてその実としての証を示さねばなりません。新約聖書でもヤコブ書1:19で「怒るにはおそいようにしなさい」と勧められています。しかし、神様は「決して罰せずにはおかない」方である、とも言われています。無限の慈悲ですべての罪は許される、というのではないのです。いかなる罪もそのものとして許されず罰する、と言うのです。怒りは遅くするが必ず、いかなる罪にも罰がくだされる、というのです。新約のメッセージは、我らの主イエスが、この罪を一身に負ってくださり私たちに赦しが与えられたということです。大変な犠牲を払って神の怒りを回避することができたのです。ここで重要なことは、私たちの敵に対する怒りをどうすべきか、ということです。この節で言われているのは、神様は、怒りを表すのを忍耐しているが必ず罰を与えられる、ということです。もちろん、ナホム書ではアッシリアの罪が背後にあるのですが、今の我々の状況に当てはめてみてよいと思います。“神様が必ず罰するので自分で戦う必要はない”ということを言っています。実際は、ユダ王国はたびたびアッシリアへの攻撃を企て、逆に散々な目にあわされていました。さきほどのアッシリアとユダ王国の歴史の中に示されています。イザヤは一切軍事的な同盟を組むことに反対しました。これは私たちの現在についても新しきイスラエルはどう行動すべきか、についての示唆を与えている、と思います。私個人のレベルにおいても同様です。ローマ書12:19で「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」とあります。この言葉自身は申命記32:35からの言葉のようですがナホム書もこれに通じています。私などは、「あたまにきた」と言って、やつけてやりたい人間が多数います。特に政治家には頭にくる人間が多い。その都度、口で「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」と繰り返します。

4節から6節までをお読みします。「4 主は海をしかって、これをからし、 すべての川を干上がらせる。 バシャンとカルメルはしおれ、 レバノンの花はしおれる。5 山々は主の前に揺れ動き、 丘々は溶け去る。 大地は御前でくつがえり、 世界とこれに住むすべての者もくつがえる。6 だれがその憤りの前に立ちえよう。 だれがその燃える怒りに耐えられよう。 その憤りは火のように注がれ、 岩も主によって打ち砕かれる」。バシャンはガリラヤ湖の東北で今のゴラン高原です。放牧に適した地です。カルメルとは地中海沿岸のカルメル山の近郊で雨が沢山降りぶどう栽培で有名です。レバノンは豊かな森がありレバノン杉で有名ですこれら3つは、4節では豊かな地の代表として引き合いに出されています。それらの地が衰えていく、と言われています。このような神の力がアッシリアをニネベをも滅ぼすことになるのです。

7節でちょっとホッとする表現がでてきます。「主はいつくしみ深く、 苦難の日のとりでである。 主に身を避ける者たちを 主は知っておられる」とあります。「いつくしみ深く」とあるのはヘブル語の「to:b」と言う「良い」という意味の言葉です。口語訳は「恵み深く」、新共同訳も同じです。フランシスコ会訳は新改訳と同じく「慈しみ深く」です。英語訳もほとんど「good」ですから、日本語訳は少々読み込み的訳ですがそもそもヘブル語の「to:b」にはいろんな意味がありますので、神様の性質を表す訳としてはこれもよいのかな、とも思います。最後の「主は知っておられる」は神様によって知られる者となり、愛のもとに入れられる、ことを意味しています。「知る」という言葉はヘブル語の「ya:da:」ですがアモス書3:2ではこの言葉は「選び出す」と言う意味で用いられています。即ち、神様によって知られるようになる、というのは神様によって選び出される、ということなのです。主に身を避ける者たちを選び出し、神の愛と恵みの下に置かれる、ということです。祝福の言葉です。そして8節では「しかし、主は、あふれみなぎる洪水で、 その場所を滅ぼし尽くし、 その敵をやみに追いやられる」と言っています。ここはニネベ壊滅の預言と理解することもできます。実際にBC612にアッシリアが滅びた時、ニネベは洪水によって壁が壊れ、その決壊したところをバビロニアとメディアの軍隊が入って来た、と言われていますので、この節で言う洪水の話などは預言の成就だと解釈する人も居ます。「預言があたった」としてすごい、すごい、というのは、私は好みません。これらの部分では神様の性質を私たちに示している、ところに重点がありますし、将来預言を語るのが主な目的ではありません。また8節以降は主がアッシリアに告げているのか、ユダに言っているのか、ナホムに言っているのか、絡み合っています。

　9節以降1章の終わりまではアッシリア・ニネベに対する滅びの予告や、その過程の下でのユダ族の救いについて語られています。心に留めておきたい節を取り上げてみます。13節です。「今、わたしは彼のくびきを あなたからはずして打ち砕き、 あなたをなわめから解き放す」とあります。アッシリアとユダとの関係にあてはめると、アッシリアの支配からユダを解放する、と主なる神がおっしゃられている言葉と理解できます。わたしが注目したいのは7節の表現と合わせ見るとどうなるか、ということです。“主はいつくしみ深く、主に身を避ける者達のくびきをはずし、なわめから解き放す”と繋げて読むことができると言う点です。思い出す御言葉があります。マタイ11:29-30をお読みします。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」とあります。本当にこの御言葉はいつ読んでもこころに安らぎを覚えます。この言葉は私を教会に導いた言葉ですので忘れられません。主なる神、我らが主イエス・キリストは軛をはずし、なわめから解き放ち、あらためて軽い軛を負ってついてきなさい、とおっしゃっています。

　15節に「見よ。良い知らせを伝える者、 平和を告げ知らせる者の足が山々の上にある」と言われています。この箇所はローマ書10:15で福音を述べ伝える人が必要である、ということの引用で出てきます。このナホム書1:15の「良い知らせを伝える者」はヘブル語で「mebase:r」即ち「ニュースを運んでくる人」ということです。このギリシャ語訳は「ユーアンゲリゾメヌー」でありマルコ福音書1:15の「時が満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」の「福音・ユーアンゲリオー」と同じ語です。従って福音とは「良い知らせを伝えること」なのです。マルコ福音書の「福音」は新約聖書のヘブル語訳では「ベソラー」と訳され、ナホム書の「良い知らせを伝える者・メバセール」の変化形です。この「良い知らせを伝える者」という表現はイザヤ書にも三度出てきます。40:9をお読みします。「シオンに良い知らせを伝える者よ。 高い山に登れ。 エルサレムに良い知らせを伝える者よ。 力の限り声をあげよ。 声をあげよ。恐れるな。 ユダの町々に言え。 「見よ。あなたがたの神を」。ここは所謂第二イザヤの最初の章であり、イスラエルの救いの預言が始まるところです。第二イザヤはナホムの後ですから、イザヤ書のこの箇所はナホム書から採られたもの、と推測できます。私たちクリスチャンにとってみてこの「良い知らせを伝える者」は主イエス・キリストなのですが、私たちは主に従うものとして、この良い知らせを告げる役を仰せつかっています。次に「平和を告げ知らせる者」というのが出てきます。平和はユダヤ人のあいさつの言葉「shalo:m」です。ギリシャ語では「eile:ne:」です。もちろんイスラエル信仰において「平和」はまず「神との平和」であり、その神との平和が確立しているところでは神の創造物、人間と人間、人間と自然、人間と動植物との平和が齎される、という事です。そのことは当然のことながら戦争の無い世界を意味します。キリスト者はその神の国の証人です。

　2章、3章はニネベ滅亡の預言です。若干の箇所についてみてみます。3:1-3をお読みします。「ああ。流血の町。 虚偽に満ち、略奪を事とし、 強奪をやめない。/むちの音。車輪の響き。 駆ける馬。飛び走る戦車。/突進する騎兵。 剣のきらめき。槍のひらめき。 おびただしい戦死者。山なす、しかばね。 数えきれない死体。 死体に人はつまずく」とあります。戦争、内乱の現実はこのようなものなのでしょう。ゆっくり読むとたまらなくなります。このナホム書の文脈では、ニネベ滅亡の情景ということになりますが、このことは世界中で、昔から繰り返されてきました。ナホムの心には滅亡近いエルサレムがそのように映っていたかもしれません。ナホム書はアッシリア・ニネベの滅亡を告げ、ユダの救いが来る、との「良き知らせ」を告げることに意味がある、と言われていますが、ユダの救いに関する部分は少しであり、大部分はアッシリア・ニネベの滅びの預言です。これらは、アッシリア・ニネベに範をとって述べているが実は預言者の意図はユダ王国の命運について警告しているのだ、と解することもできます。すると、ユダの救いは、ずっと将来のイスラエル復興の希望について語ったものということも出来ます。本当はアッシリア・ニネベに関する範囲を超えた、人類の罪と救いについての預言なのかもしれません。

　最後に3:18-19においてアッシリアに対する滅亡の告知をもってナホム書はおわります。お読みします。「アッシリヤの王よ。 あなたの牧者たちは眠り、 あなたの貴人たちは寝込んでいる。 あなたの民は山々の上に散らされ、 だれも集める者はいない。/あなたの傷は、いやされない。 あなたの打ち傷は、いやしがたい。 あなたのうわさを聞く者はみな、 あなたに向かって手をたたく。 だれもかれも、 あなたに絶えずいじめられていたからだ」とあります。「牧舎たちは眠り、貴人は寝込んでいる」と言われています。牧舎は宗教的指導者、貴人は軍事的・政治的指導者と理解できましょうか。眠る、というのは死んでいることの隠語です。要するに、アッシリア王の部下は殺され、民を集める者はもういない、と言っています。この「集める者」という言葉はイザヤ書13:14にも出てきます。「追い立てられたかもしかのように、 集める者のいない羊の群れのようになって、 彼らはおのおの自分の民に向かい、 おのおの自分の国に逃げ去る」と言われています。このイザヤ書の「集める者」がナホム書に受け継がれ、これが更にエレミヤ書に引き継がれます。エレミヤ書9:22を見ます。「語れ。――主の御告げはこうだ――人間のしかばねは、畑の肥やしのように、刈り入れ人のあとの、集める者もない束のように、横たわる」とあり、「人間のしかばね」など、先程見たナホム書3:3の表現に類似しています。19節、最後の節は残酷です。アッシリアに散々いじめられていた民はアッシリア・ニネベの滅亡を、手を叩いて喜ぶ、というのです。祝宴の場が備えられる、と理解しても良いかもしれません。気持ちはよく解ります。ナホムもそのような気持ちを隠さず表した、と考えるべきでしょう。しかし、我々の信仰にとって重要なのは、主なる神が祝宴の時まで導いて下さるのであって、自らの力でこれを為す、ということではない、と言う点です。先ほどの「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」のです。また昔は戦争も喧嘩の延長で、相手がダウンすると喜ぶのが許されるような場面もあったかもしれません。豪傑の一騎打ちなんて言うのはこの範囲で見ることも出来たでしょう。しかし、近代以降、戦争は惨憺たる情景以外は残らず、喝采などやる場面もありません。本当に戦争は罪の塊になってしまいました。牧歌的なところの残る喧嘩や一騎打ちなどではないのです。

それにしても今までお読みした、陥落後のニネベの情景はなまなましいものです。私の父は写真が好きで、中国南部に戦争で行った時も写真機を持ちあるっていたという人間です。私は小学校高学年の頃だったと思いますが、父の撮った古い写真のなかから明らかに戦争で死者が数体転がっている写真を発見し、驚愕したことがあります。小さな写真でしたが、死体であることはすぐわかりました。一人兵隊が立っていた、と思います。父はその後、自分史を書き戦時中の事も書いていましたが、この写真は入っていませんでした。殺伐とした、荒涼たる雰囲気の小さな白黒の写真でした。今のイスラエルとその周辺、イラク、アフガニスタン等の状況はナホム書3:3の言う「やまなすしかばね」があちこちに見られる状況です。いたたまれなくなります。近年は無人の兵器がしかばねを作っています。「殺している」という罪悪感を、感じなくて済む手段です。攻撃する方は、それで良いのでしょうが、これでやられる方はたまったものではありません。キリスト教徒が大半を占めるアメリカという国の政府がこのような大罪である戦争を進めている、という現実を直視しなければなりません。これは主イエスの教えと真逆な事柄です。また、散らされた民の再集結とも見做されているイスラエルという国があのような残虐なことをパレスチナの民に行っている、という現実も我々の目の前にあります。何かが狂っています。イザヤ、ナホムの言う「集められた者」の為すことではありません。ナホムはこのような狂った現実に対し、ニネヴェへの「滅びの預言」を通し、神の裁きが避けられないこと、を告げ知らせているのです。